

### 乙訓不登校を考える親の会『大地』5周年を迎えて

大地の子どもたち、若者お父さんお母さん5周年おめでとうございます。

大地が乙訓地域の不登校や行きづらさを抱えた子どもたちや若者たちの居場所として、また親たちの支え合いの場としての役割を果たして、5年の歳月を重ねてこられたことに心より敬意を表します。

このコロナ禍においても、定例会を開催し参加者一人ひとりを尊重した運営を大切にされ、また講演会や親睦会などの取り組みも広がり、大地はしっかりと乙訓の地に根を下ろしていると感じています。

昨年は「全国のつどい」を京都で開催しようと大地の皆さんも事務局として府下と全国の仲間と一緒に準備をしましたが、残念ながらコロナ感染拡大により中止となりました。

最後に、大地がよりゆったりと温かく子どもたちを包み、親の支え合いの砦でありますように。

---

登校拒否・不登校を考える京都連絡会

前田 五郎

## 乙訓不登校を考える親の会『大地』5周年にあたって

長岡京市で不登校支援を始めて、何人かのお子様やお母さま方と幸せな時を紡いできました。支援してきたというより、共に道を探って来たという感じです。

始めは塾に厭々連れてこられた子どもも、何回か面談を重ねると、家族には言えない苦しみを、声をつまらせながら吐露します。一日中、暗い部屋でゲームに没頭している子どもは、罪悪感に苦しんでいました。また、野球やテニスが得意で頑張っていたら褒められるのに、ゲームは何故認めてもらえないのかと私に問いかけてきます。彼らが「マイクラフト」で創る建物の素晴らしさに圧倒され、不登校だからこそ獲得した「プログラミング」のスキル。様々な発達特性があるゆえ、学校という環境には馴染まなかったとも思います。

この子達に私がしてきたことは、「途切れることのない学習支援」です。学校に合わせない形での学び。私の塾で学んだ子達が今はロボットの研究をしていたり、大学に入学して自分の得意な分野での学びを進めているという近況を聞く度に心の中で小さな拍手をしています。

でも、今でも夜中に来る長いライン。「助けて下さい。くるしいです。」そんな子達や親御さんと共にこれからも歩んで行きたいと願っています。

---

支援塾「コスモス」  
米澤 るみ

## 学校を相対化する

1970年代後半から80年代の前半にかけての校内暴力期の非行問題を抱えた少年たちは、受験体制化した制度としての学校を拒否し、仲間のいる学校に登校してきました。しかし、制度としての学校が、彼らを抑圧し排除する力が高まるにつれ、彼らの世界は地下組織化され、制度としての学校、教師と鋭く対立しはじめました。彼らは「学校の中が一番安全なんじゃ！」といいました。彼らも、仲間と「保護」を求めて学校に来ていたのです。

今日、学校は新自由主義的統治の場と化しています。すなわち、学校は、学校の求める価値をすすんで受け入れる者のみが包摂され、受け入れられない者は自己責任として排除される場になっています。90年代の少年による重大事件を機に、学警連携の強化、教育基本法改正、少年法の改正を背景に先の学校の変化が進みました。

その結果、2010年以降、不登校の急増状況は今も続いています。「そんなことでは、社会に出たらやっていけないぞ」こんな教師の言葉に象徴される学校を拒否し、家庭内に身を置く不登校生徒、家庭内に居場所のない少年たちは、可視化されていないアンダーグラウンドにさまよっています。

子どもたちにとって、学校を絶対化せず「学校は行けたらいいけど、行けなくてもいいよ」と寄り添う大人が必要です。そして、私たちは、「不登校問題」は、日本の社会・政治・学校の問題として向き合うことが大事だと思います。

---

乙訓少年支援の会「ひまわり」

藤木祥史

## 乙訓不登校を考える親の会『大地』5周年にあたって

『大地』の歩みは、不登校の問題に対して「あきらめ」ではなく、子どもたちを中心に会員の皆様や支援者の皆様が自分たちのこととして受け止め、子どもたちの未来のために取り組んだ「挑戦」であったように思います。

親同士が悩みを共有して、子どもに向き合える場を作ったり、子どもたちの居場所づくりに取り組んだり、子ども自身のつらい思いを聞く場を設けたり、様々な努力が実を結び、子どもたちの「生きる希望」を育んできたように思います。

社会福祉協議会〈地域福祉〉との関わりでは、「社協まつり」の交流コーナーのご協力、地域の事業所や団体と取り組む「東向日いきいきまつり」へのご参加のほか、乙訓青年会議所が地域づくりの一環で開催される「乙訓ドリームフェスタ」への出店などにご尽力いただきました。

こうした活動を通して子どもたちと関わり、学校に行けない姿ではなく、地域のために頑張ろうとする姿を目にしてきました。率先して地域との交流を図ろうと頑張る子ども、その子を応援するために協力する仲間、ご家族、地域の皆様の姿がありました。不登校の子どもたちは一人ひとりには生きる力があり、その力を発揮できる地域社会の輪が広がればよいと思います。それは制度や施策だけではなく、乙訓不登校を考える親の会『大地』のような活動により実現するものだと思います。

最後になりますが10年15年とこの活動が続きますことを心より祈念いたします。

向日市社会福祉協議会  
事務局次長兼地域福祉課長  
木下博史





## ”学校ではない居場所”で子どもをサポート

大地の設立5周年、お祝い申し上げます。

こどもたちの成長過程で困りやつまずきが生じたときに、親や子が孤立してしまうことがないよう、こうしたつながりを維持されていることは、本当に貴重なことだと思います。

発達のペースが人と違ったり、なんらかの特性を抱えていたりするこどもたちにとって、現在の学校という環境は負荷がかかりがちです。

その中で、こどもたちが不登校という選択をおこなったときに、単なる学校からの離脱が、社会からのドロップアウトに直結してしまいかねないのが日本の現状です。

私たちヴィキッズは、「福祉」というカテゴリーの事業者のため、受け入れられるこどもたちに一定の制限はあるものの、発達に課題を抱えたこどもたちの、学校以外の<sup>※</sup>オルタナティブな居場所となれることを目指しています。

今後も、大地のような親の会や、家庭、学校、地域社会と連携しながら、こどもたちが社会との接点を維持し、豊かなこども期を過ごせるよう、児童福祉施設として可能な限りお子さんたちのサポートをおこなっていきたいと思います。

児童発達支援・放課後等デイサービス ヴィキッズ

岡田 耕輔

※ オルタナティブ … alternative 代わりの手段、選択肢



## 『大地』5周年によせて

## ～小さな寺子屋から共に小さな一歩を～

小さなお寺ですが、誰でもが利用できて心安らげる場所をという思いから「釈迦 fe」を設けました。「釈迦 fe」という空間で「来迎寺 寺子屋」として向日市の委託を受け学習支援を行うようになりました。

ほぼ同時期から不登校の子ども達の居場所としての活動も始まりました。私は不登校の子どもを持つ母親です。子どもが不登校になった時、どうしたら良いのか、とても悩みました。何としてでも学校に戻さなければと焦り、相談することもできず辛い毎日でした。そんな暗闇の真っ只中でしたが、不登校の子ども達やお母さん達に寄り添えるような活動をやっていきたいと思いました。

子ども達の居場所として2018年、3名の子ども達から始まりました。大学生や大学院生のスタッフの方との関りも大きな力となって、今では10名ほどの子ども達が利用してくれています。居心地の良い環境と、子ども達の自己決定を大切に、子ども達のやりたい事や、興味のある事にはできる限りサポートしながら、一緒に楽しむという事を大切にしています。子ども達の希望で土曜日の開設も始まり月曜日、土曜日の週2回開設しています。

人の痛みがわかる優しい子ども達です。しんどい事もたくさんあるでしょうが自分らしく成長してくれたらと願います。

「大地」を通してお母さま達がつながり合い悩みなどを共有し力に変えて行かれる。本当にいいなあといつも感じています。これからも、たくさんの子ども達やお母さま達と様々な形でつながっていきたくないと願っております。

寺戸 来迎寺 寺子屋

福井ともみ



親子でつくった たけのこひろば

大地5周年おめでとうございます。私が大地と関わるようになったのは、長岡京市で参加していた「子どもと共に育つ親の会フェリーチェ」のアドバイザーの先生の紹介でした。

子どもが小学校3年生(2016年)の時に不登校になり、フェリーチェの先生の塾や居場所に通ったりしながら過ごしていたのですが、4年生の6月から向日市の適応指導教室に通い始めました。当時はわが子を含めて毎日通っている子は3人で、水曜日から金曜日の午前の3時間、楽しんで通うようになりました。笑顔が戻りホッとしたのを覚えています。適応指導教室では、保護者が知り合う機会は無かったのですが、繋がりを作りたいと思い、新しい方が来られたら、連絡先を渡し、わが子が通っていた頃にも10人程の親子と少しずつ交流の輪が広がっていきました。初めて話した方が大地の会員さんでもありました。少し通ったけれど今は通っていないとか、卒業して新しい道を歩んでおられる方などとも、今も時々ゆるーくラインで連絡をとったりしています。どの親子も一歩一歩休みつつも歩んでおられる姿に励まされます。

さて、たけのこひろばの事ですが、適応指導教室で出会った最初の3人の子から、「適応指導教室の無い日が暇だ、毎日集まったら良いのに」という声を聞きました。そこで、なぜ適応指導教室が週に3日しかないのか、月曜、火曜日でも週5日通いたい、という事を市に話しているという話と合わせて、集まる場所を作ろうという事になり、最初に通っていた親子3組で、どのくらい集まりたいか、どんな事をしたいか、会の名前など話し合い、2017年12月に「たけのこひろば」がスタートしました。週1回公民館中心に、それぞれの子のやりたい事に取り組んできました。外出では、公園、山、スケート、センバツ観戦、競輪場、室内では、調理、ボードゲーム、お喋り、自学自習などなど、参加したい時に参加という形でした。別の曜日に誰でも参加できる卓球も市の施設に登録して始めました。

公民館は大人の見守りが必要でしたが、子ども達から親だと嫌だと言われたり、喧嘩になる事もあったりして、知り合いの地元の大学生に、ボランティアで来て頂けないかお願いし、就職されるまで約1年関わっていただきました。また、「大地」を通して繋がりが出来た「来迎寺」さんの「釈迦fe」<sup>\*</sup>を2018年6月から居場所としてお借りできる事となり、そこで行なわれていた学習支援のボランティアの大学生、院生も関わってくださる事にもなりました。親以外の方との関わりは本当にありがた

く、しんどい思いを抱えている子ども達に、寄り添い優しく明るく関わってくださる姿には学ぶ事が多いです。また、市の議員さん達が見学に来られて、適応指導教室の拡充を議会でとり上げてくださって、月曜日から金曜日まで通えるようになったり、放課後等デイサービスに通うことができる子は、そこでの出席が学校での出席日数として認められたり、市内に小学生の足でも通える場所が様々広がり、選べるようになってきた事は大変ありがたく嬉しい事でした。他にも向日市社協さんが地域の催しに参加させてくださったり、京都洛西ロータリークラブさんがミカン狩りへの招待、パソコンの寄付、設置など、「来迎寺」の福井さんと繋がった事で広がった地域の方の応援は心強い事でした。

運営費は、かかった分をそれぞれで負担していましたが、「大地」からも補助金を頂き、ボランティア交通費や遊び道具の充実に充てる事が出来ました。また、様々な助成団体への申請も福井さんが中心に取り組んでくださっています。

わが子もですが、卒業する子も出て、私も毎週のように顔を出す事がなくなりました。今いる親子でまた、それぞれに好きな事に取り組んでいけたらよいのかなと思っています。現在(2021年)は、福井さんが中心となって、新しい子も含めて、10人ほどの子ども達が、くつろいで過ごされているそうです。

先日「一からつくるラーメン作りやるから、見に来ない？」と誘って頂き、久々に親子で訪ねました。事前に準備した麺の生地、鶏がらスープ、ネギ油などが並び、自家用の生地はそれぞれのごね方、切り方、湯がき具合で、バラエティに富み、時間はとってかかるけれど、本当においしいラーメンが出来ていて感動しました。変わらず、熱くて温かい場所でした。

たけのこひろばで過ごした豊かな時間、出会った方々は、今でも私の宝物で、生きる力となっています。子ども達もそうであつたら良いなと思っています。

支えてくださった皆様本当にありがとうございます。これからもよろしくお願い致します。

(M)

\* 釈迦 fe ... 2018年6月~地域に開かれた居場所としてスタート。その後、子どもたち(不登校の子含む)の居場所作りをしている。

## 大山崎町にも「教育支援センター」を

14年前、子どもが中学校に行けなくなり、夫も私もその状況を受け止められず、混乱した状態でした。教師とは、どうすれば子どもが学校に行けるかばかりを話し合っていました。今考えると、子どもの気持ちに寄り添わず、逆の対応をしていたと思います。学校から勧められ心療内科を受診したり、スクールカウンセラーと面談したりしたけれども、光は見えませんでした。

そんな中、参加した学童保育の研修で、「第13回登校拒否・不登校問題 全国をつどい in 京都」のピラを受け取り、藁をもつかむ思いで参加しました。たくさんの当事者や親、教師が参加されていて、参加者全員が安心して思いを語れる場でした。誰も責められず、受容され、何より自分ひとりではない、と感じられる初めての経験でした。親だけでなく教師も多く参加されており、不登校を理解しようとされている姿に感銘を受けました。

その後、新しく来られたスクールカウンセラーと定期面談が始まり、共に状況を整理して考えられるようになりました。担当者が変わっただけではなく、「全国をつどい」に参加したことで、私の不登校への見方が変わったからだと思います。子どもは学校に行けなくても、週2回の塾と、所属していた野球チームに毎週末休まず出席していました。学校に行けなくても、それで十分だったのです。今は心からそう思えるけれど、当時はそこまで思えなかった自分がいました。

さて話は変わって、我が子を理解したいと願い、不登校について学び始めた私は、長岡京市では、既に1993年に適応指導教室が始まっており、2005年には教育支

援センター事業が開始されている事を知りました。また、向日市にも適応指導教室が週3日だけが設置されていることを知りました。大山崎町にもあったら、子どもの居場所になっていたかもしれない、と思いました。大山崎町の教育委員会に確認すると、「適応教室を作してほしい」「長岡京市の適応指導教室に通わせてほしい」という声が、以前から学校や教育委員会に寄せられていたことがわかりました。しかし、「他の自治体の適応指導教室には通えない」「大山崎町での実現は予算面もあり難しい」と返答していたとのことでした。

私は、長岡京市の教育センターを見学し、事業の概要について説明を受け、大山崎町にも設置したいと強く思いました。大山崎町で不登校の子を持つ親達に呼びかけ、案を練って当時の町長、教育長宛に要望書を提出しました(下記参照)。議会で取り上げられ、2016年成立した『教育の機会の確保に関する法律』の後押しもあり、大山崎町に2018年6月から教育支援センター(適応指導教室)が開設されることになりました。しかし、教室は1部屋しかなく、週3日午前中のみでの開設で、改善の必要があると考えています。今後は、近隣の実績に学び、子どもにとって安心できる居場所としての教育支援センター(適応指導教室)になるよう願っています。

「全国をつどい」で当事者の仲間が大切と気づいた私は、4年前から「大地」に参加しています。参加者みんなが、安心して思いを語れる貴重な居場所となっています。

(栗山 千雅子)

### 教育支援センター(適応指導教室)設置のお願い 【抜粋】

1. 当事者(本人・保護者)の教育相談やプレイセラピーなど、個別の状況に応じて、当事者の意思を尊重しながら、センターでの教育相談体制を組んでいく。
2. 担任の先生と日常的な連携を大切にしながら、情報交換等の担任会を定期的に設定する。
3. 保護者同士の交流の場として保護者会を開催する。
4. 教室では、児童生徒が、教育指導員や友達と活動時間を共有することで「この教室は楽しい」「自分の気持ちを理解してくれる」「また教室に来よう」という気持ちになれるような指導・援助内容にする。具体的には、本人にあった教科の学習、実技実習(調理・図画工作など)、軽いスポーツ、文化体験学習・スポーツ体験学習・野外体験学習・社会体験学習、友達との話し合い、個別面談など。
5. 不登校以外の教育相談も気軽にできるよう広報していき、当事者の悩みに早期対応できる機関にする。
6. 以上のような内容を保障するため、相談援助、教育支援に関わる専門性を有する指導者を配置する。

現在、大山崎町には、不登校児童生徒が学ぶ場(適応指導教室)がなく、近隣の自治体の適応指導教室に通うことはできません。学ぶ場、居場所としての教育支援センター(適応指導教室)の早期実現をお願いします。また、当事者との懇談の場の設定も併せてお願いします。